

事  
村井静馬著  
情  
明治  
太平記  
六編  
上

~14  
2504  
11





待  
14 遠  
2504 號  
26-11 卷

官許

村 鮮

既よ此  
蛇足の  
鮮一具  
して局  
うん夏  
て蝦夷  
の應接  
談議  
官許

井靜馬編輯  
齋永濯畫

明治太平記

全

永京書林

延壽堂發兌

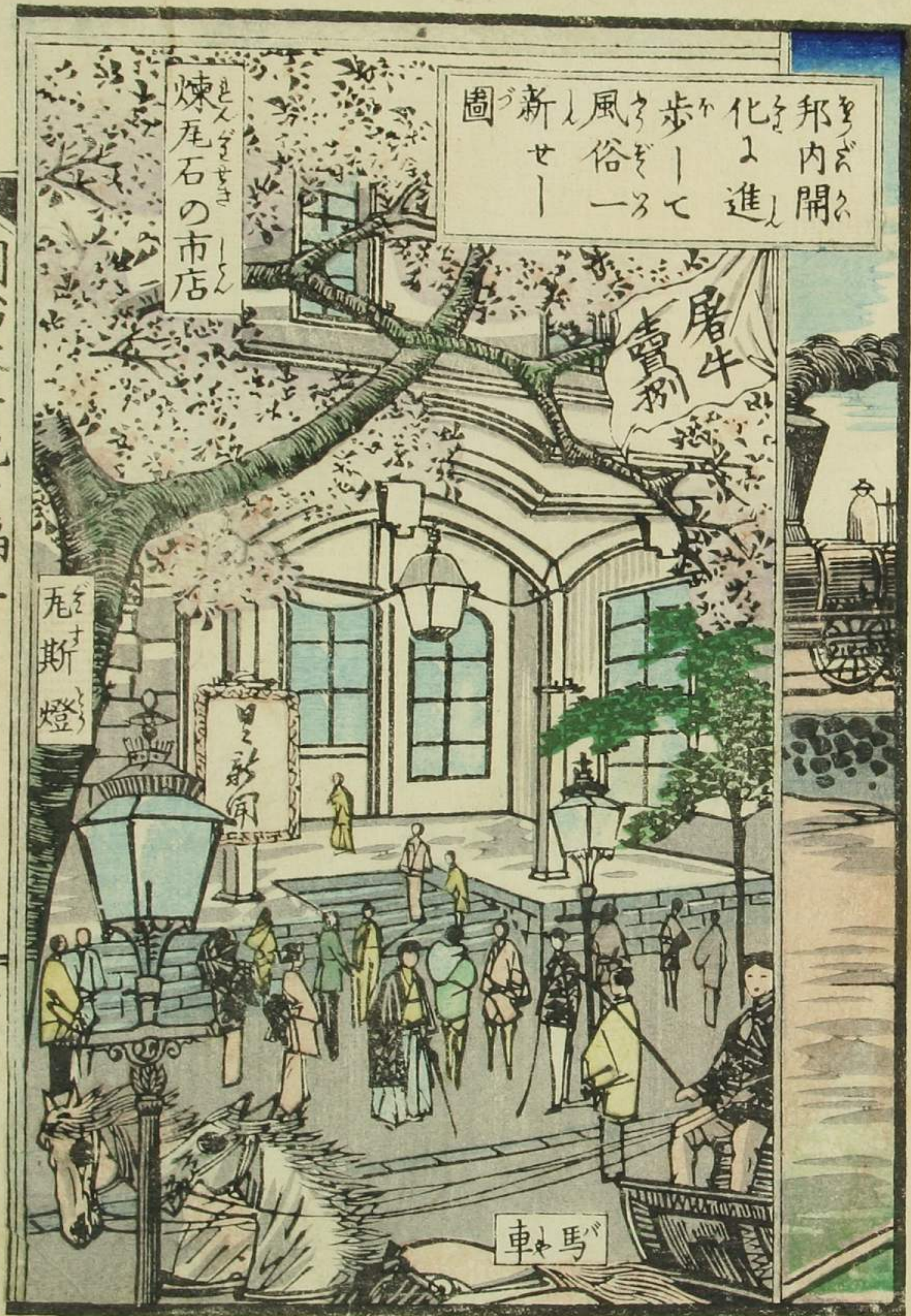
書を綴るや固より事實を編纂せし聊  
併を加へて為よあはと虚飾せざる事短うよ  
うんと専ら宗とせらぬ依りて豫て大約六編  
結んんと腹藁るせしも筆と採るふ及び三省  
最惜と思ふ條の多うりく本編一の巻み  
地の一段落よ至れば佐賀及び臺灣の事跡支那  
まて編んうの尚二三帙よ及んり所謂下手の長  
兒童等かあはび咲んり

明治八年十二月廿日出版

村井靜馬誌

明治太平記六編上





邦内開  
化歩  
風俗  
新圖

煉瓦石の市店

屠牛賣

瓦斯燈

馬車



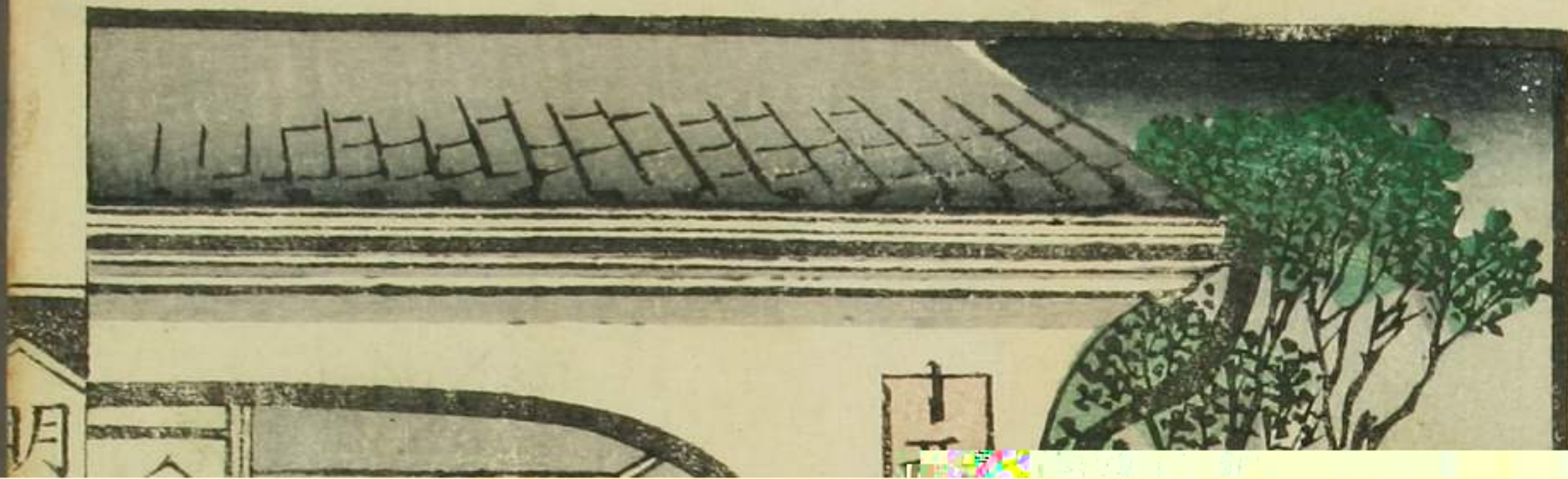
電信線

蒸気車

郵便

人力車







卷之壹

官軍仁恤を施して賊の病院に発砲を禁め  
尋で降伏を勧むるに起り蝦夷地の  
騷擾鎮静して後諸藩主版籍を奉還せし  
も終に郡縣の制に改するに畢る

卷之貳

佐賀の士族等征韓などの激論と主張して  
其黨二千五百餘人暴挙に及ぶ莫より起  
り既に内務卿官兵を率ひて彼地に進軍  
せしむるに稍戦争に及べり終る

明治太平記六編卷之一

東京

村井静馬著

余程に賊軍ハ五月十一日の戦争に水陸共し打負く

五稜郭千代が岡辨天砲臺の三ヶ所は兵を引きつ

あはれ守は官軍遂に函館を恢復し及びた

其勢ひみよ乗トクン津軽松前の両藩士等が賊の

病院に砲撃をせし病者ハ走る莫も慄るは坐して

死と待つをくりりし官兵の軍監某ある者之を





聴つて馳来りて西落  
くせ病者と療養する  
大度の所置と言ふべ  
以下の軍艦五稜郭  
六町の所は近付き頗  
發百中して為よ郭  
等牛と屠りて酒を  
流弾来りて破裂為

の兵士等と大  
莫ハ猶前日の  
斯て十二日の  
逼らんと漸次  
りし砲撃及  
震ひ動けり  
飲み杯盤  
狼藉たる所  
はれは坐上  
此時古屋作  
進んぞ其間五  
早天より甲鉄船  
置と施一我が輩

忽ち七人よ及び  
色を失なつり然  
寄り逼らば這ハ倘賊  
とぞ時よ病院よ在  
を官医師よ托  
るべき走き言送  
官兵来り侵す  
薩藩某馳来りて殊

賊徒等大胆  
も官軍の陸兵  
奇計ありん  
處の病者某  
榎本全次郎  
其略曰く  
病者等坐  
寛大の處  
胆を冷一軍  
敢て此郭は  
慮りて故あり  
ある者より書簡  
松平太郎へ和睦  
昨日おの院を  
之死と俟ち  
置と施一我が輩



療養と加ゆる至  
薩州藩池田某以  
の形勢に至り貴士  
取れども泰然と一  
つれど万民塗炭の  
下の人夫何と云  
死と覚悟と究り而  
然とあらず飽も

らるれば是等の旨赴  
達し及ぶべき条喋  
慮ありて平穩の道  
ぜよとあり此時榎本  
田氏の懇諭の赴き何  
地よ来るハ豫て歎  
み北門の警衛を  
ざる時ハ此地を去り



病院の患  
 者官函よ  
 托して書  
 と五稜郭  
 此總裁よ  
 贈る



月谷大平言六集



月谷大平言六集



天廷千古の英断とめて北地の一分と下  
カと尽して以て北門の成りてき天恩  
べき旨一同の告諭あり然して後我非  
を動いて朝兵の抗せ罪ハ何等の嚴  
とも甘んぶ其朝裁を奉ぜん自然此夏  
と共うて天戮の附んと請へ此旨池田氏  
記してあると送り且榎本其以前蘭國  
び得し所の海律全書二巻は於るに実

賜は各死  
方分の一と報せ  
千二人の既して干戈  
罰し所せらる  
可容なくべ一同枕  
傳へよきと昏  
留学中既して学  
皇国無二の書

あつて兵火の為は焚失はん最も惜む  
官軍に贈りたり是日午過る頃千代  
一本木に撃て出姑く官軍と接戦せし  
せぬしと互ひに兵を引くとつと諸十三日  
永山某とつる者辨天砲臺に赴き  
めて懇ろに賊徒等と諭し降伏せ  
あを賊兵或る降らんと言ひ或ひは異  
之と沮むもつらつら松岡磐吉相馬主計

堪ざれば之と  
岡の賊兵等  
又勝敗と決  
朝兵の軍監  
慕順の説依  
と勸む  
議を唱へつ  
等五稜郭に



至りつ榎本以下は談むれども衆議區々うつくいし  
 決せぬ斯てまゝ十四日軍監田島圭蔵あり者又辨  
 天砲臺より来り榎本は謁せんと請ふも永井玄蕃  
 川村祿四郎等即ち五稜郭は往きく是等の由を  
 傳ふるも榎本歎く千代が岡に至り茲より田嶋は  
 接まれば圭蔵は怒るゝ順逆の利害を陳べ専ら恭  
 順の説を主張し帰順せよと言へるも金次郎も  
 内心より頗る悟る所ゆゑども部下の物議を憚りて

深く圭蔵の厚意を謝せれど降伏の義は肯せぬ田島へ  
 殊は榎本が人とありと壯んありと一既は別は臨む時  
 潜るふ落涙よ及び々斯の如きの剛勇の男子はまゝ再び  
 得がかりんと瓦礫と共に碎ん夏皇國の御為に最  
 も惜むは堪むと言へば榎本襟を正しくして明日又  
 軍門は會せんとし言ひ捨る遂は五稜郭は立飯  
 りぬ是は於て榎本も是迄と思ふを射方の  
 諸士は相議し快く一戦ふ共は討死あまんとす



専ら必死の兵備と整  
 戦鬪の便宜と一む  
 輩ハ笈と編る塚と濟  
 降るるの他賊兵ノ  
 本固くか一禁め車  
 留め何ふせん  
 門扉を啟き出せ  
 天砲臺の賊兵等糧  
 火を郭外の民家ニ  
 此夜賊兵のうち怯  
 潜るふ五稜郭を脱  
 寸所知りて之と追  
 此に至り渠尚生を  
 却つて是等の者の  
 其後十五日に至り  
 既ニ竭されバ士卒  
 遣ハ一と

ざるよう一と衆議  
 之を官軍ニ報ぜ一  
 絶するをてて復本  
 此日官軍より別一  
 の旨と諭さ一む  
 使者と凌辱せ一  
 潜め賊徒の降伏せ  
 千代が岡を襲撃を固  
 決一臆て人を遣ハ  
 五稜郭と道路の隔  
 面々ハいま之を  
 使者と千代が岡へ  
 命と奉ぜざるの  
 憤り夜ニ乗じて兵  
 進め直ち  
 千代が岡といハ津  
 輕家の

月平大平言六編

六





賊將中島  
奮激  
大官兵  
と接戦

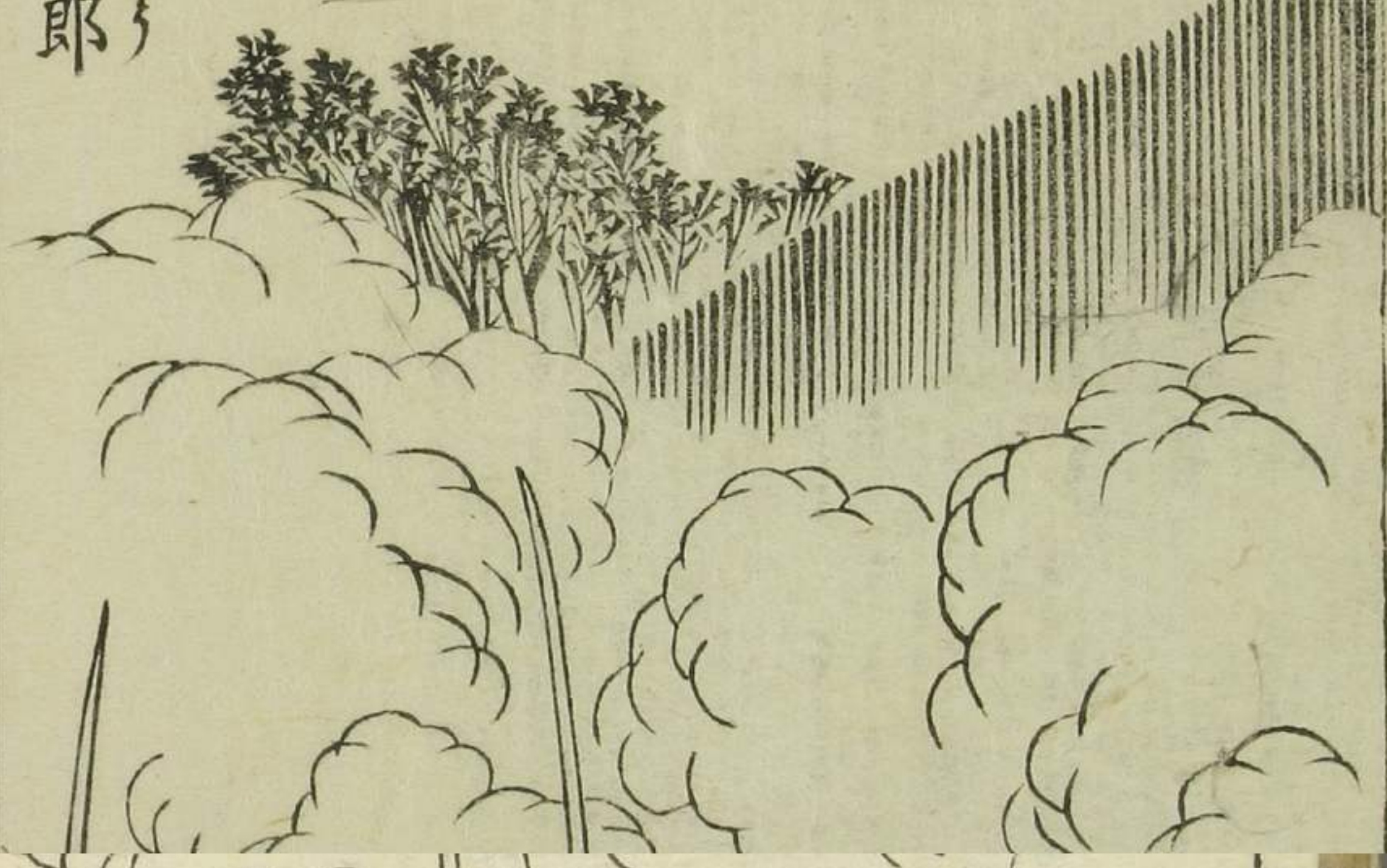
明治大正記六編上



明治大正記六編上



若跡めいて要  
 害介をり堅固  
 あつねど賊の老  
 將中島三郎助ハ  
 その性頗る剛  
 殺あつて敢て  
 動まる気色も  
 かく其二子恒太郎



房次郎及び柴田伸助  
 始め血気の壮士と率へつ  
 忽ち堤上よ駈登り寄手よ  
 向ひて乱射する度最も  
 烈しくうらぶ隊長長来嶋  
 頼三ある者賊の放る弾丸よ  
 右の服とび打れうらぶ頼三更よ  
 事ともせむ益衆を励まうて





一挙に破れと指揮せられば従兵樽沢某等数名  
来島が躰を見るよりも何れも大に奮激し  
大丈夫の陣中より誰も斯くを切りとられと壕  
を乗踰へ関を破りて力戦する支数刺し及べば又  
彼の中島父子三人柴田も俱に勇奮を顯ハ  
敵詐多傷つケル其筋も數ヶ所の重傷を蒙り  
枕を並べて斃ししる遂に千代田が岡の陣営を  
官軍奪ふ所に至り次の日官軍の参謀より酒

五樽の書簡を添へて頼本に與へて曰く曩も足  
下蘭國に留学中傳習せし海律全書二巻に於てハ  
本邦無双の珍書なる故烏有に属するを惜み天  
下の為に之を寄贈を感荷何ぞ己時より人他日譯し  
天下に公布せん幸いよ念とて勿く因る庶酒五樽を  
呈し聊く將士の労苦を慰まるとぞ恧て此日官軍に  
り又薩州藩某と五稜郭外の陣営に遣はるるを賊兵奔  
藤辰吉ある者出てあはれと接せられ某則ち言へるや



今曉の戦ひ幸ひも  
進んで五稜郭とも  
軍の後ろれバ狼  
知せり宜しく兵備  
て曰く官軍我が敗  
ども恚る細事と父  
便宜は従ふと何時  
烏合の兵姑く天在

末日と約すとも  
支那はんやと答ふ  
然らば我は匹敵  
軍備の助けをみる  
敗軍の餘りとつ  
帯剣して腰はら  
はま支勿れと断然  
此夕は至り五稜郭

を抜くうへ直ち  
欲まれども貴官ハ敗  
を恐る故は先づ報  
せよと其時辰吉笑ッ  
使節を煩はさるれ  
ふも足されバ貴方の  
あよ固より我等の  
敗れを取りとるの

官軍は匹敵する  
く言つて處實は  
狸仗の類ひを送りて  
吉声を励まし今  
糧の備へもつら且ツ  
つのみあり貴意を煩  
は某諾して退り  
姑めく辨天砲臺の



賊徒等降参せしと听くより頼と甲斐多く思ひらん  
 抜々陣中を去りて降伏する者尠うわの榎本  
 松平の両總裁の衆と召びつ諭し言ふやう我輩  
 曩は君家の為し諸君と同心協力し既し今日  
 至る迄死せまんば已むまじと誓ひする丹心を毫も  
 動くまじうされども遂は宿志と遂げ得ざりて斯の  
 如くあり果しは最早數日と保ちざりし今限りある  
 勞兵とのて六十餘州の大敵に抗し無罪の士卒を

害せんま豈唯おとと快しとせんや故は曩は我々  
 兩人首謀の罪と謝せんが為し衆に代りて自殺せん  
 と短刀と手は執りしとき大塚雀之丞等三名直ち  
 之を禁めし故は退りて熟考するに我々が身と潔  
 ろくせんとして衆は害と遺さんへ又大丈夫の所為より  
 此因く断然衆に代り我輩兩人官軍に往き私に干  
 戈と動かせし罪と以て皇裁を仰ぎ甘んぶ天戮し  
 就くと決せり諸君憤激の志に及んで我々意は就





月台太平記六編

辭と盡  
 て兩總裁  
 諸士の憤  
 憑と諭



月台太平記六編



是よと最懇ろよ諭まふぞ衆も聞て血涙よ及び陣中蕭然とあろりて遂に總裁の議に決し使者と官軍に遣はりて明朝榎本松平等出て軍門に降るべければ因て請ふ其期を砲を發するまでありれと是に於て官軍より黒田中山の両参謀千代岡に至りて榎本に對面してりやく降伏せんとす日刻し五稜郭を開くべきの期と約せり斯く十八日約に違へず榎本釜次郎松平太郎及び荒井郁之助

大鳥圭介等の面々ハ出て官軍に降りて天戮に就んて後請ふ仍る軍監前田雅樂乃ち二小队を率ひて五稜郭を受取んと彼の郭中へ赴き一弾藥兵器悉く目錄に照してあはせと渡り賊衆は何れも涙を揮ひて函館の寺院に屏居を介れば榎本等降伏と決議する時臨み則ち齋藤辰吉を「モロラ」の地へ遣りて降伏の事を告ぐべ彼地の兵士も来り降る是に於て降伏の者



前後合せて千餘人<sup>よま</sup>よ及び其他大砲三十餘門小銃千  
六百餘挺米五百俵と納<sup>い</sup>ると云ふ此役や賊の海兵  
おのく<sup>く</sup>學術<sup>せつじつ</sup>は精練<sup>せいれん</sup>一就中榎本等最も水戦<sup>すいせん</sup>は長ぜ  
一故官軍攻撃<sup>こうげき</sup>は苦<sup>く</sup>一が甲鉄<sup>こうてつ</sup>とり堅艦<sup>けんかん</sup>のうて常<sup>じょう</sup>  
万弾<sup>ばんだん</sup>と受<sup>う</sup>ると雖も更<sup>さら</sup>は屈<sup>くつ</sup>するところわが賊軍<sup>ぞくぐん</sup>も生<sup>な</sup>  
是<sup>これ</sup>が為<sup>ため</sup>は甚<sup>し</sup>ど窘困<sup>きゆうこん</sup>為<sup>な</sup>りとも斯<sup>かく</sup>て蝦夷地<sup>せまいち</sup>の争乱<sup>そうらん</sup>も  
既<sup>すで</sup>に平定<sup>へいぜい</sup>し及び一官軍<sup>くわんぐん</sup>ふも夫々<sup>それぞれ</sup>は凱陣<sup>がいじん</sup>は及ぶ  
ぞ榎本<sup>えのほん</sup>以下の降人<sup>かうじん</sup>も多<sup>おほ</sup>く東京<sup>とうきょう</sup>は護送<sup>ごそう</sup>せらるその始<sup>はじめ</sup>り

脱兵<sup>だつへい</sup>等<sup>ら</sup>が品川<sup>しんがわ</sup>と出帆<sup>しゅつぱん</sup>するとた仏蘭西<sup>ぶらんせい</sup>人三名<sup>さんめい</sup>らり與<sup>とも</sup>  
其船<sup>そのふね</sup>は乗組<sup>のりぐみ</sup>とて蝦夷地<sup>せまいち</sup>まで至<sup>いた</sup>りて軍<sup>つぐみ</sup>と援<sup>えん</sup>するところ  
一が既<sup>すで</sup>に敗軍<sup>さいぐん</sup>は及ぶるとするた榎本<sup>えのほん</sup>等<sup>ら</sup>はこれと論<sup>ろん</sup>  
る東京<sup>とうきょう</sup>は還<sup>かへ</sup>ら<sup>ら</sup>一は政府<sup>せいふ</sup>その旨<sup>おの</sup>と佛公使<sup>ぶつこうし</sup>は  
告<sup>つ</sup>げ彼の三名<sup>さんめい</sup>を本邦<sup>ほんぱう</sup>に在留<sup>ざいりゅう</sup>すると許<sup>ゆる</sup>さぬは是<sup>こゝ</sup>に於<sup>お</sup>  
て佛公使<sup>ぶつこうし</sup>則<sup>すなは</sup>ち件の三名<sup>さんめい</sup>を罰<sup>ばつ</sup>し直<sup>ただ</sup>ち日本<sup>にっぽん</sup>へ押<sup>お</sup>  
送<sup>そう</sup>す其中立<sup>そのちゅうりつ</sup>の令<sup>めい</sup>を犯<sup>か</sup>せばあり此月<sup>このつき</sup>會津<sup>あいつ</sup>以下<sup>いげ</sup>各<sup>おの</sup>  
藩<sup>はん</sup>の主謀<sup>しゅぼう</sup>の臣<sup>おん</sup>一二名<sup>ににめい</sup>づと誅<sup>つ</sup>し尋<sup>たづ</sup>ねる番町<sup>ばんまち</sup>九段<sup>くだん</sup>坂<sup>さか</sup>の



上うへに招魂社きょうこんしゃを建たらせとし正月二日五月十五日九月廿三日  
を以もつて伏見役ふし見やく以来いらい所々の戦争せんそうを討死うらしたふせし者ものの冥みよ  
を祭まつりたまはこ此頃東京このころとうきょうより横濱よこはまへ傳信機でんしんきを設たけ事こと  
の報告ほうこくを使づけしる儲たくわまは六月詔しもうして丁卯戌辰以もつ  
降くだの軍功ぐんこうを賞たりしる兵部卿官ひしやうおきやうのきやう及び大宰帥官だいさいすい官九條  
左大臣澤三位以下二十三家島津毛利以下九十餘藩よそ  
西郷隆盛大村益次郎以下百余名よそに秩禄ちやくろく或ハ金かねを  
賜たまひ尋たづねて左右大臣大納言参議さんぎの三職さんしやくを置おき餘ハ皆みな

官名くわんめいを改あらめらしる是こゝは先薩長土肥せんさくちやうとひの四藩しほより上表じやうひやう  
りりと开ひらけ其封土そのほうどを私有しやくゆうせしると論ろんト土地人民とちじんを  
奉還ほうげんせんと請こふ因より自餘じよの諸藩しよはんに於おても又従したがひて  
之これを請こへども朝廷てうてい私ひそくは決断けつだんせむは大のおほいとれを衆しゆと  
議ぎし既すでにはあらむと許ゆるし遂つひに公卿諸侯こうけいしよこうの名称めいを  
改あらめて總すんて華族くわしやくとし新あらしる府藩縣三治ふはんけんさんち一致いちじの  
政度せいどを立て従前じゆぜんの諸藩主しよはんしゆをのめりて假かりし藩知事はんちしに  
充あて封建てんけんの制せいを一變いちへんせり余あればは蝦夷地鎮静せまいちぢんじやう及およ



び―後官より人負を遣はされて追々開拓に至ると  
 以て既に其年八月に至り彼の地を北海道と改称  
 十一ヶ国は分割せり則ち〇渡島〇後志〇石狩  
 〇天塩〇北見〇膽振〇日高〇十勝〇釧路〇千島〇  
 是あり此月金澤鹿見島静岡名古屋和歌山  
 熊本山口廣島福岡等の九藩北海道の開拓  
 を命ぜり且又更に九月に至り會津藩の降伏人  
 等と格外的寛典より北海道に移住あさむ此月

朝廷より大の宥典を行われ輪王寺宮及び徳川慶  
 喜以下奥羽越よて官軍は抗せし旧諸藩主の禁錮を  
 赦す斯の如くは朝廷より専ら仁恤を施され府藩  
 縣の三治一致して政令全く王室より出ると雖も又或を  
 藩に依り尚舊弊を減らすを得ず名あつて實の行は  
 れざるを患ひ知藩事の職を免ぜらば人更を請ひ或は  
 まる管轄の士民隣縣の附屬として其任を辞するを  
 ゆるもぞ朝廷普く衆と議し遂に明治四年に至り



舊藩主等が知事  
へ知事以下の官負  
廢し總て縣とせ  
四民太平の餘澤

明治太平記六編

たるの職を免下更に任撰して各藩  
を置し幾程もあらず悉く藩を  
しより始めて郡縣の制を復し  
を浴し漸次に開化の進歩あり

今之終



